



2012年 2月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 40

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 32 (聞き手 高橋素子)

高橋 > 想定外の天災で、日本列島を震撼とさせた年も去り、二〇一二年の幕が明けましたね。でも、原発事故処理の目処さえ立たぬうちに、国内外で政治経済の不穏な状況が、毎日の様にニュース面を騒がしていますね。

会長 > 「俳句は自然を詠む。川柳は人間を詠む」と単純に割り切っている方も世の中には多いのですが、今を生きている作者自身が、世の中の動きに無縁ではいられない。俗にいう俳人の仮面を脱いで、いつも「すっぴん」の自身をさらけ出して句にしたいものです。

高橋 > 「俳人の仮面を脱ぐ」、成る程！そういうお話、もっともっとお聞きしたいと思いますが、それは又、別の機会のお楽しみに。

それでは、本日もご解説、よろしくお願い致します。前回に続いて秋の人事の部、季語は「相撲」です。

投げられて坊主なりけり辻相撲 其角

勝たとも知らで起たる角力哉 雅因

組あふて物打かたる地とり哉 蕪村

踏ん張つて四十を越えぬ相撲取 羅川

老にきと妻さだめけりすまひ取 召波

へつたりと人のなる木や宮角力 一茶

なげられし角力か親の念佛かな 大江丸

角力とる二階を叱るあるじかな 鳴雪

斬髪の飛入の相撲はまけにけり 紅線

馴染ある季語のようで本当に沢山の句が……。よろしくお願ひ致します。

会長 > 「投げられて坊主……」、

辻相撲は民間で随時行うもので、朝廷で定期的に行うものに対して言ったのです。投げられて坊さんだったことが分かり、みんなから囃したてられたのでしょう。

「勝たとも知らで……」、

投げられて、同体だっのか負けたと思って起き上がったところ勝っていたということ。

「組あふて物打かたる……」、

「地とり」は能・狂言の語りで低く唸る調子のことですね。「組あふ」は、アクションです。格闘しつつ唸る。これを相撲の句としたのではないのでしょうか。

「踏ん張つて四十を……」、

相撲取も四十歳が限度なのでしょう。ところが 四十歳を超えての相撲取りが目の前で踏ん張っているという驚きです。

「老にきと妻さだめ……」、

年ですよお父さんと、相撲取が妻に言われている。年齢の制限をする山の神というところでしょう。

「へつたりと人のなる・・・」、

神社の境内の相撲大会は満員御礼。木によじ登っての見物人はまるで木の実のごとく、つまり木が人を「ならせて」いるのです。「へつたり」はべったりですね。

「なげられし角力か・・・」、

相撲大会に出ている子を応援している親は、力負けしているわが子を見ておれない。念仏を唱えているわけです。

「角力とる二階を叱る・・・」、

二階家の間借りで、二階の借家人の子だくさん。男の子は、相撲をとるから、下に済んでいる者はたまらん。大家に言いつける。大家はムダだと知りながら「叱る」わけです。

「斬髪の飛入の相撲は・・・」、

斬髪は「ざんぎり」のこと。明治初年に断髪令が出て、「ちょんまげ」の人は髪を切りました。後ろへ垂らして結わえずに襟のところで切ったもので、これを「ざんぎり頭」と言いましたね。この斬髪は「ひ弱」だったということです。

高橋 > 当時の相撲の様子がよく分かるご解説、有難うございます。面白いですね。

次の季語は「案山子」です。人の姿に似る案山子には皆、愛着があるのでしょうね。驚く程の句が詠まれているようですよ。あっ！会長も案山子がお好きなようですね。一句見付けました。

あおむけにされ放心の捨て案山子 健

では、改めて山のような案山子の句、ご披露致します。ご解説下さい。

居風呂の下や案山子の身の終 丈草

近付になりて別る案山子かな 惟然

疇道を行けば案山子の矢先かな 東吏

寝て居るは乞食立たは案山子かな 也有

足もとの豆盗まるる案山子かな 也有

人に似よ老の作れる案山子かな 蕪村

笠とれて面目もなきかかしかな 蕪村

稲刈れば化をあらはす案山子かな 蕪村

島主案山子に逢ふて戻りけり 蕪村

姓名は何子か号は案山子かな 蕪村

我足にかうべぬかるる案山子かな 蕪村

まだまだ案山子の句、半分もご披露していませんが、それにしても蕪村は案山子がお好きだったようですね。

会長 > 「居風呂の下や案山子・・・」、

居風呂は、今風の風呂で、蒸風呂と区別するための呼び名ですね。句は、案山子の最後は、風呂の焚きものという哀れを詠んだものです。

「近付になりて別る・・・」、

擬人化ですね。馴染んできた頃には、お役御免で捨案山子。艶つぽい案山子に情の移りしか？

「疇道を行けば案山子・・・」、

これは、「弓に矢をつがえし案山子吾を狙ふ」ということでしょう。

「寝て居るは乞食・・・」、

案山子には古着や襤褸を着せるので乞食に似てしまうのです。寝てるのが乞食、立っているのが案山子ということでしょう。

「足もとの豆盗まる・・・」、

畦豆を盗まれても案山子には責任ありません。害鳥を追い払うのがお役目ですからね。

「人に似よ老の作れる・・・」、

爺さんのつくる案山子のリアルにて・・・。

「笠とれて面目もなき・・・」、

笠をかぶって顔を隠していた案山子。笠をとられて恥ずかしきかなということですね。「おざなり」の目鼻だったのですね。

「稲刈れば化をあらはす・・・」、

稲田の中に立っている案山子は、人間に化けているわけですが、稲刈の済んだ田んぼに立っているのは、案山子そのもので化けの皮が剥がれた。

「畠主案山子に逢ふて・・・」、

「逢ふて」としたのは 案山子が恋人というわけではない。畠主は見回りに行つて、なにごとも無く、案山子に「頼んだよ」と声でもかけたのでしょう。

「姓名は何子か号は・・・」、

これは可愛い案山子なのです。案山子ですから姓を知りたい。山の田に立っているなら、山田案山子ということになります。

「我足にかうべぬかる・・・」、

案山子の頭(こうべ)を足で抑えて抜いたのです。なんとなく哀れではありますね。

高橋 > 有難うございます。もしや、「有漏地より無漏地へ帰る一休み 雨ふらば降り風吹かば吹け」、一休和尚の心境でいらっしゃるのでは。ここで、一休みしたいところですが、まだまだありますよ。残りの案山子の句に参ります。

くらぶれば同じかかしのなかりけり 碩布

二つあるかかし容を違へけり 召波

雨ふれば人によく似るかかしかな 成美

淋しさに出たかと思れば案山子かな 大江丸

法衣着て袈裟かけて寺のかかしかな 八千溪

をかしさは主に似たる案山子かな 潮音

大方は足一本の案山子かな 蒼苔

路はたの地藏と語る案山子かな 紅縁

黍の穂に案山子の顔やこそはゆき 紅縁

化寺に足二本あるかかしかな 紅縁

会長 > 「くらぶれば同じかかし・・・」、
なるほど、観察すれば似ているようで、服装も顔もそれぞれ個性的なのです。

「二つあるかかし容・・・」、
容は、容貌ということ。ひとつは怒った顔、他は笑った顔とかでしょうか。

「雨ふれば人によく・・・」、
衣服がぬれると案山子の体に馴染みますから似てしまいますね。

「淋しさに出たかと・・・」、

案山子が好んで句に詠まれるのは、やはり人間臭いところ、哀しさや可笑しさを併せ持つからでしょう。淋しい人間に見えたので近づいてみると、案山子だったということです。

「法衣着て袈裟かけ・・・」、

可笑しいですね。寺の前などに、寺所有の小さな田のある場合があります。住職の扮装をさせた案山子があったのでしょうか。

「をかしさは主に似た・・・」、

案山子を見れば、畠の持ち主がわかるということですね。へのへのもへじでも、目鼻立ちが似てしまう。

「大方は足一本の・・・」、

ということは二本足の案山子もあったということですね。あるいは知る限りでは、一本足の案山子ばかりという程の意味でしょう。

「路はたの地蔵と語る・・・」、

のどかな風景ですね。お地蔵様も案山子も、にこにこ、ふむふむ、なのでしょう。

「黍の穂に案山子の・・・」、

黍は雑穀の一種。イネ科の植物ですから、食用とされましたね。黍の穂が案山子の顔を撫でた。擬人化して「こそばゆい」ということです。

「化寺に足二本ある・・・」、

やはり足二本がありましたね。案山子の世界では、一本が通常で、二本はお化けという発想が素晴らしいですね。

高橋 > 本当に、人を飽かせぬ面白いご解説、今日も有難うございました。でも、本日の句は、「相撲」と「案山子」だけでしたので、お疲れでしょう。あともうひと頑張りお願いして、最後に季語を使った浪曲調の一句、お願い致します。

会長 > ♪草相撲おおおおお 八百長ないかと案山子がああ見張るうううう 丁度時間となりましたああああ この続きはああああ 来月号おおおおお ♪